

報告書

コロナ禍が及ぼす障害者の 社会参加の影響に関するアンケート

障害連（障害者の生活保障を要求する連絡会議）

2021年10月

もくじ

I. なぜアンケートを行ったのか	2
アンケート結果のあらまし	2
II. どのようにアンケートを行ったのか	3
III. アンケート結果	3
1. 回答者について	3
2. 福祉サービスについて	4
3. 外出について	8
4. 活動、仕事について	10
5. 暮らしについての自由記述	12
IV. アンケートから見てきたもの	14
アンケートを作るのに参考にした資料	16

1. なぜアンケートを行ったのか

新型コロナウイルス感染症の大流行により、障害者の仲間はいま、生活の危機に直面している。施設入所される障害者は生活空間を複数の人たちと共有するため、常に感染リスクの危機感を抱えている。地域で暮らす障害者も、外出制限やソーシャルディスタンス（人と人の距離を保つ）があるため、生活を変えざるをえなくなったり、介助者不足にも拍車をかけている。

コロナ禍で、そういった障害者の実情、当事者の声は、他の災害と同様に平常時より増して社会から見えにくい状況に陥っている。そこで障害連では、コロナ禍の私たちが何を悩みどう生活したかの情報共有と記録の一つとして、アンケートを実施することにした。

このアンケートは、コロナ禍で、私たち障害者の社会参加がどうなっているかについて調べ共有するものである。具体的には次の3点を目的とした。

1. 新型コロナウイルス感染拡大が及ぼしている障害者のくらしを内外に共有する
2. くらしについて文章化を求めるのは、なかなか難しいが、アンケートであれば収集しやすい。コロナ禍の障害者のさまざまな声を記録し、将来の障害者運動につなげる
3. アンケートからみえてくる課題の中から政策要求化できるものは、行政に要望していく。

アンケート結果のあらまし

29名が協力してくださり、主に次の5点が見えてきた。

(1) 施設入所者はより感染リスクを敏感に感じており、（オンラインを含め）会いたい人に会えないなど制限が多い日々を過ごしている。

(2) 福祉サービスは継続できているが、28名のうち12名が何らかの制約を求められることがあった。それぞれのくらしに合う感染予防について障害当事者・支援者・行政で相談していく必要がある。

(3) コロナ禍で福祉サービスの必要性を感じる者が多く、その人の生活に基づく支給判断が重要である。

(4) 29名のうち18名が思い通りに外出できておらず、はっきりとした行政の感染制御が急務である

(5) テレワーク・テレ活動の呼びかけに戸惑っており、障害者専用のテレワーク支援及び安心できる対面活動の復旧が必要である。

II. どのようにアンケートを行ったのか

実施期間：2021年3月1日～同年8月12日

実施方法：Google フォーム、メール、郵送（回答者がやりやすい方法を選んでもらった）

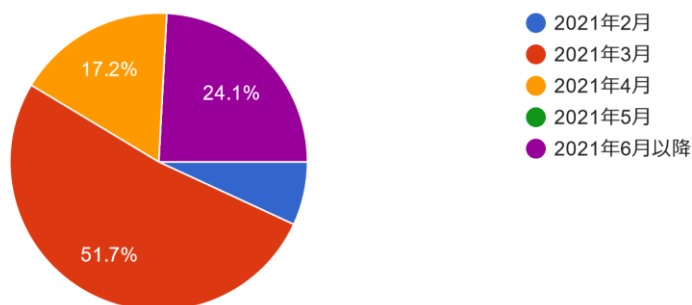
質問内容：

- あなたについて（3問）
- 福祉サービスについて（6問、任意含む）
- 外出について（4問、任意含む）
- 活動・働くことについて（4問、任意含む）
- コロナ禍の暮らしに関して、思うこと（1問）

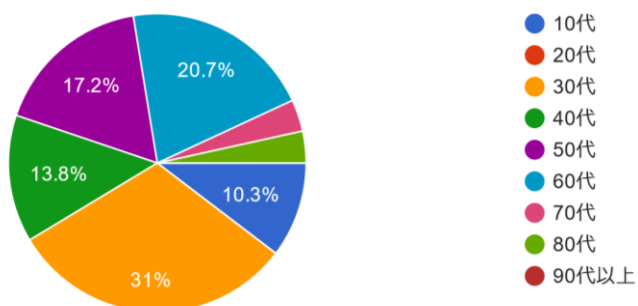
III. アンケート結果

1. 回答者について

- A) 「この回答はいつ記入しましたか？ 記入月を書いてください」と聞いたところ、2月が2名、3月が15名、4月が5名、6月以降が7名となっている。
(設問: 《1-1》。29名が回答)



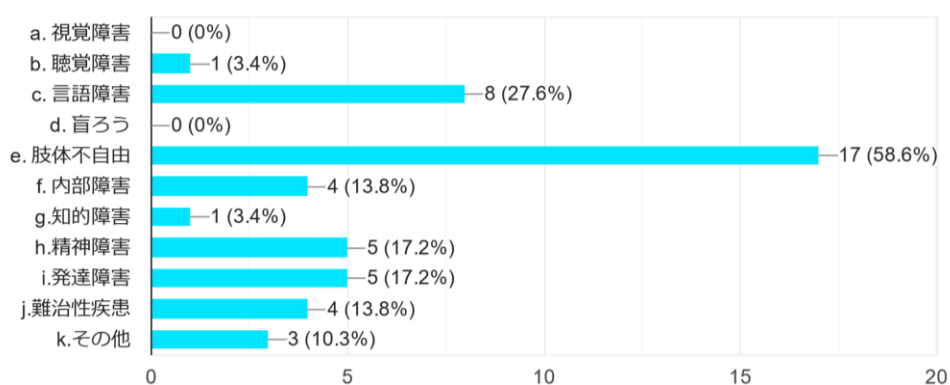
- B) 回答者の年齢は順に10代が3名、20代が0名、30代が9名、40代が4名、50代が5名、60代が各6名、70・80代が各1名となった(設問: 《1-2》)。29名が回答)



C) 障害に関して、ラベリングにならないことを念頭に置き「あなたの障害について聞かせてください。医学的診断や障害者手帳によるものでなく、あなた自身が機能障害を感じている全ての障害をご記入ください」と聞いた。(設問:《1-3》。29名が回答)

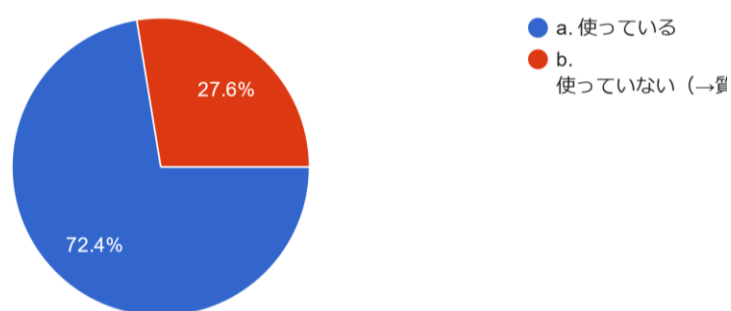
肢体不自由が17名で最も多く、次に言語障害が8名、精神障害・発達障害が5名、難治性疾患が4名、内部障害が4名、聴覚障害が1名、知的障害が1名となっている。

その他では、「口で話せない」「アトピー、アレルギー性鼻炎、メニエール、感覚過敏」「呼吸器機能障害」「両股関節に人工関節を入れており、就労に制限がある。」「医療的ケア」が挙げられている

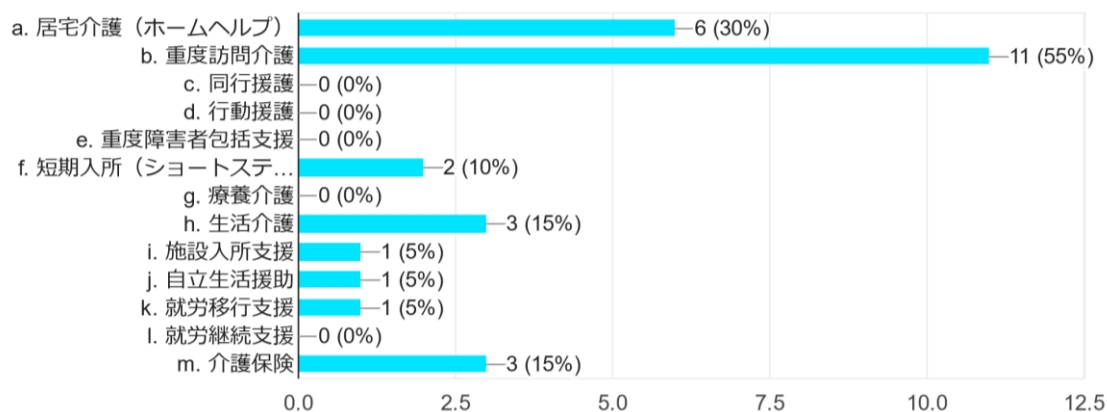


2. 福祉サービスについて

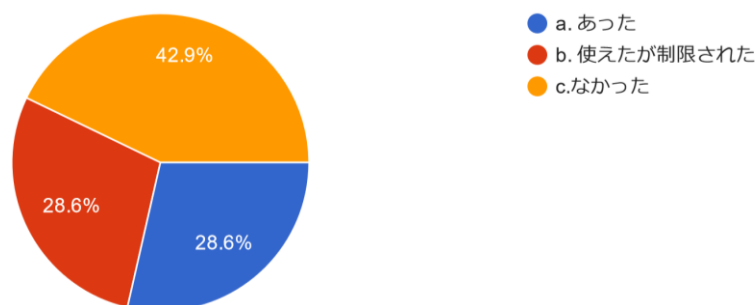
D) 利用の有無（あなたは、福祉サービスを使っていますか？）を聞いたところ、21名が使っており、8名が使っていなかった。(設問:《2-1》。29名が回答)



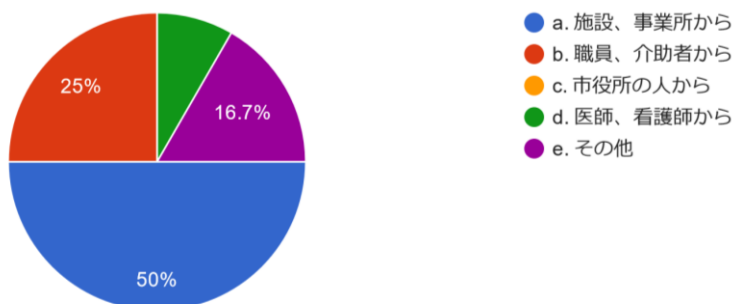
E) 福祉サービスの内容を聞いた。重度訪問介護が11名で多く、続いて居宅介護が6名、介護保険が3名、生活介護が3名であり、短期入所が2名、療養介護・施設入所支援・自立生活援助・就労継続支援が各1名となっている(設問:《2-2》)。20名が回答)



F) 「現在のところ、新型コロナの影響で、普段の福祉サービスを使えないことはありませんか?」と聞いたところ、「なかった」(使うことができています)が9名、「使えたが制限された」が6名、「あった」(使うことができない)が6名だった。(設問:《2-3》)。21名が回答)



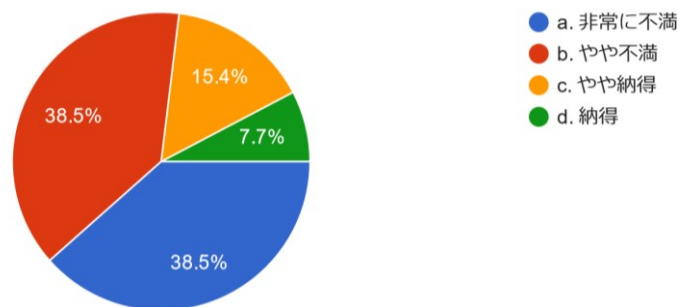
G) 誰から控えるよう言われたかと聞いたところ、「施設、事業所から」が6名、「職員、介助者から」が3名、「医師、看護師から」が1名だった(設問:《2-4》)。12名が回答)



その他では、次のような回答があった

- 自分
- 緊急事態宣言中は、介助に入るのを休みたいという個人介助者がいた。
- 放課後等デイサービスで、昨年1回目の緊急事態宣言中は自治体の方針でオンライン利用ができた。が、その後の緊急事態宣言では自治体からオンラインの利用が許可されなかった。他の近隣自治体ではオンライン利用ができていた。

控えるよう言われたことに関しどう思ったか。「やや不満」が5名、「非常に不満」が5名、「やや納得」が2名、「納得」が1名だった。（設問:《2-5》。13名が回答）



理由は以下の通りだ。

- 非常に不満
 - 親と同居の場合と言われたが、親ができないからサービスを利用しているのに一方的にできないと言われた。
 - コロナウイルスのせいで、会いたい人に会えない事が不満です。
 - 唐突に言われた
 - 通所日3日→2日になって、1年以上です
- やや不満
 - PCR検査の結果が出るまでヘルパー停止。感染防止マニュアルがあれば停止しなくてもよかったかも
 - 通常の派遣でも人材不足なのにコロナで来れなくなった介護者もいたため、生活の危機を感じた為です。
 - オンライン利用によって、感染リスクを抑えた上でのサービス利用ができるのに、自治体によってそれができるできないの差があることは悲しかった。感染リスクを恐れ、通所させるかどうか迷いながら結局通っていた。
 - 高校受験で2浪中です。高校浪人は想定されていないため放課後デイサービスが学生という枠ではないので使用できなくな

る。日中一時の利用は出来たがそもそも医療的ケアの子供をみ
てくれる場所は少なく市内でも3ヶ所くらい。候補としていた
民間の施設は看護師の確保をしておくには利用頻度がなければ
難しいと言われた。しかしコロナが蔓延し重度障害で医療的ケ
アの必要な子供の感染リスクもあり利用せず自宅で過ごして
いたら、経営が成り立たないので医療的ケアの子のための看護師
をやめてしまい利用できなくなった。そもそも医療的ケアの人
が利用できる場所が少ない上にコロナが重なり去年はほぼ家で
過ごす状態でした。民間の施設が看護師を雇っておけないとい
う理由も致し方ない部分もありそのためやや不満。昨年12月
に児童相談所に依頼し18歳から利用できる身体障害者センタ
ーを利用できるよう面談を行ったが、現時点では17歳、大人
の制度と子供の制度の狭間で実際の年齢は18歳にはなってお
らず市役所での手続きも混乱したこと、コロナで判定会議が頻
回には行うことが出来ない事情で結局利用は今年6月からにな
り週3回だけ通えるようになり社会とのつながりもできるよう
になった。

- やや納得
 - その人の考えや生活環境があるから仕方がない反面、こういう
介助者が複数いたら、生活できなくなるといった。（実際は、
残りのメンバーでなんとか回せたから、安心した。）
 - 緊急事態宣言が出て、コロナ感染が怖いのでやむを得ない状況
だと思ったから

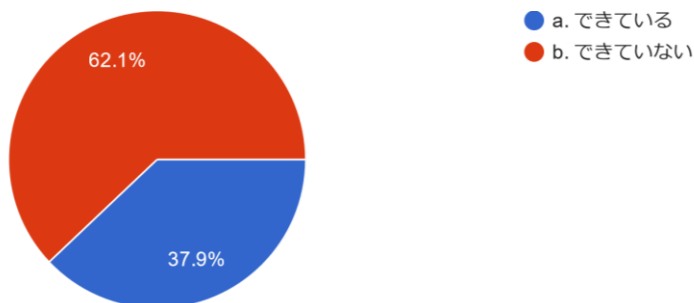
H) 普段から福祉サービスを使っていない人に、「コロナ禍で、福祉サービスを使え
れば良いのと感じることはありますか」と聞いたところ、8名のうち8名が
「ある」（感じる）と答えた。その理由は以下の通りだ。（設問:《2-6》。8名
が回答）

- 医学モデルで決めないで
- 家事援助など
- 職場での合理的配慮の理解が不十分な為
- 自分は発達障害グレーでありながら児童デイ職員、且つ子供がアス
ペルガーですが、コロナで休校になった際にデイに行ける子と行け
ない子の精神的ストレスの差を感じました。これは当事者の子供達
だけでなく、保護者も相当ストレスがありました。
- そりゃ使えれば、家族共々疲弊しているのが解消され、就労させる
ことができる。
- 体調不良の時家事がたいへん
- 体調が悪く、家事や身だしなみ、外出もままならないので。

- ヘルパーを頼みたいが、いなかのためむずかしい。

3. 外出について

I) 「現在のところ、自分の思う通りに外出することはできていますか?」と聞いたところ、「できていない」が18名、「できている」が11名だった。(設問:《3-1》。29名が回答)



I) その理由は以下の通り。(設問:《3-2》。22名が回答)

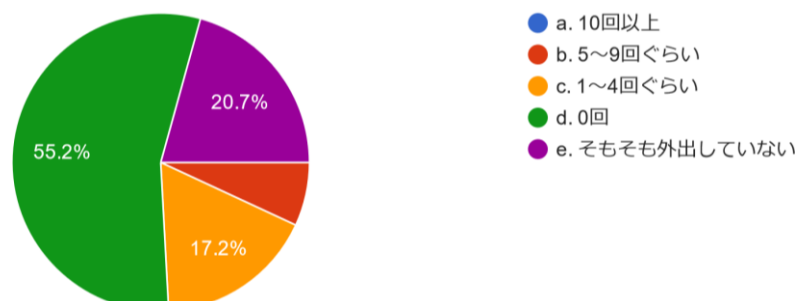
- できている
 - 我慢してマスクをつけさえすればでかけられる
 - ヘルパー介助に問題なし。
 - 介助者がいるから。でも、少なくしている。
 - 仕事があるから
 - "通所先ができたこと、コロナに対する知識ができ、恐れが当初より薄れているため"
- できていない
 - 僕が感染源になるかも
 - 自粛
 - "多少なら外出出来ますが、ある程度定員が決まっている催物だと感染対策がされていても行動しにくいです。"
 - 特に子供のイベント系は野外でもどれだけ人がいるのか予想できません。
 - 介助に手間がかかる。介護保険を使えるにも関わらずローカルルールで市町村が使わせない。
 - コロナ感染がこわい。かかりつけ医に間違いなく重症化といわれている
 - 施設入所していて制限されている
 - 更に具合が悪くなるので。コロナウイルス感染も恐怖です。
 - "仕事以外の外出は、前後の予定や介助者によって決めているので、不自由を感じる。職場に行くことで、気持ちもリフレ"

ツッシュできる時も多いが、今まで仕事+α で外に出ているので、窮屈。

- 大人数で集まるのが難しくリモートになっているので。
- 感染リスクを考えて自粛しているためです。
- 施設で他の人に感染させてしまう可能性があるため、止められているので。
- 7月17日現在ワクチン券が来ない
- 事業所のサービス提供が滞っているためと、在宅支援の押し付けで、生活介護事業所に通えない。
- 姉や娘、友人に、私のことを心配され「来ないで」と言われている。
- コロナ感染が怖いからです。

J) 「外出の際、新型コロナに関連した周りから心ない言葉を言われたことはありましたか。その回数」を聞いた。

「0回」が16名で多く、「1～4回」が5名、「そもそも外出していない」が6名、「5～9回以上」が2名いた。(設問:《3-3》)。29名が回答)

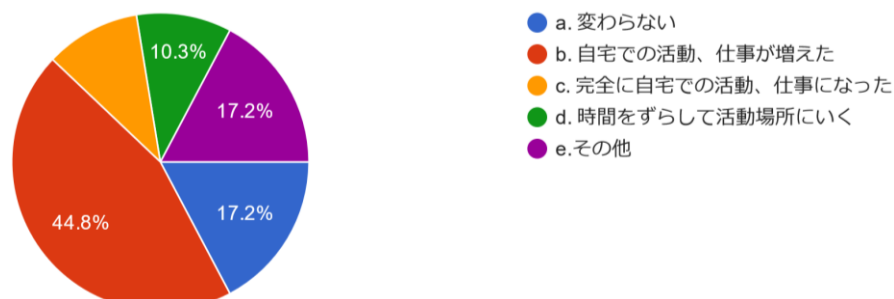


K) 心ない言葉の内容について (設問:《3-4》)。7名が回答)

- 不随意運動でマスクが外れるととおりのひとにいやなかおをされた
- マスクをずれると指摘される
- 自分達(健康な人間)だって困っているんだから、少数者は後回しである
- 市役所には、5年生存率が低いので、そのうち死ぬので取組まないという感じは伝わってきた。
- 例：職場に行かないとできない仕事なの？リモートでいいのでは？
- 感染リスクがあるから外出して欲しくないと介護者から止められました。私だけに来ているだけではなく、他の利用者様にも影響があるので控えてほしいと伝えられました。私も遊んでいる訳では無いので困ってしまいました。
- 「東京から来たんですか？」と、知らないひとに言われた。

4. 活動、仕事について

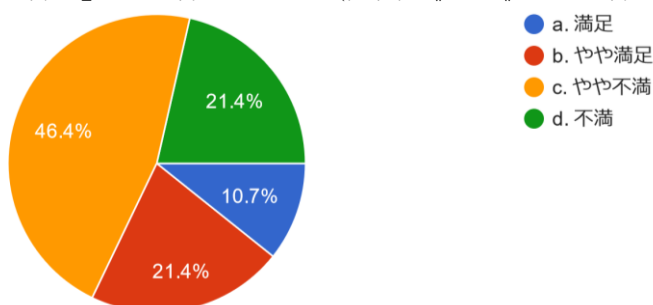
L) コロナが与えている活動・仕事の影響を聞いたところ、「自宅での活動、仕事が増えた」が13名、「変わらない」が5名、「完全に自宅での活動、仕事になった」「時間をずらして活動場所に行く」が各3名、後はその他だった（設問:《4-1》）。29名が回答）



その他では、

- イベントがなくなったり、会合も中止。
- 運動仲間や友人家族等の支援が受けられない
- バスに乗らずに徒歩（介助で）
- コロナウイルスの予防の為に、外出していない
- 住んでいる地域から外に仕事に行っていたが、辞めて、中でバイトを掛けもちしている。

M) それについて、どう思うか。「やや不満」が13名で多く、「やや満足」が6名、「不満」が6名、「満足」が3名だった。（設問:《4-2》）。28名が回答）

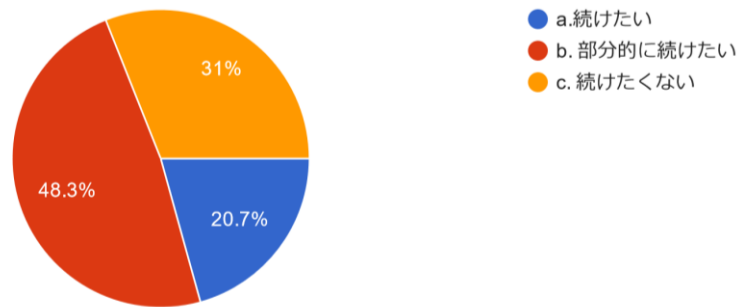


N) 理由は？（設問:《4-2》）。22名が回答）

- 満足
 - やりたいことができようになった
- やや満足
 - 出勤の際の交通上のトラブルが減った

- 体調に合わせて時間を使えるようになったこと、通勤が減ったことは良かったですが、パソコンの使用時間が増えて頭、目、手の痛みも増えてつらいです。
- リモートでできることは、リモートがあってよかったと思う。
- 人との接触が減り、コミュニケーションがより難しくなったからです。
- やや不満
 - 体調が悪いときに無理せずにすむのは良いが、運動量が減った
 - 唯一の楽しみを通院後の外食ができなくなったため
 - 会って話し合いたい
 - 時間がかかる
 - 自由に気分転換の外出もできず、新しい介助者の探すこともらえるやり方を考える必要があるため
 - 訪問看護があるので、それと生活がずれた
 - 中学や高校がオンライン授業や分散登校になった。授業を続けてもらえたのは嬉しかったが、登校できないので友達と交流することができず、入学した高校でも友達がなかなかできていない。
 - 十分な収入が得られない
 - 色々な人とつながりを持ちたいと思うがなかなか外出ができない
- 不満
 - 何もはじめられない
 - 適切に介護保険が使えず、家族共々疲弊しているから。
 - 対面で得るメリットがなくなった。
 - 施設で身体的介助はかわらない。個別の活動にはすべて答えてもらえない
 - コロナウイルス感染の蔓延期間が長い
 - 事業所の考えの押し付けであり、利用者の生活の困難さを理解していないから。

-) 「コロナが終息したあとも、このコロナ禍での活動、仕事スタイルを続けたいと思うか」を聞いたところ、「部分的に続けたい」が14名で多く、「続けたくない」が9名、「続けたい」が6名だった（設問:《4-3》）。29名が回答）



5. 暮らしについての自由記述

P) コロナ禍の暮らしに関して自由記述を求めたところ、23名が回答してくれた。

- 早く自由に外に出たい。旅行もしたい。コロナ禍だと介助者を集めにくい。早く大学のサークルを始めてほしい。
- 生活そのものを変えていく必要があるで、対応していきたい。
- Zoomで参加できることが増えたと共に普段行けない階段や狭い等で行けない店がテイクアウト出来るのは良い点だが高齢の両親がストレスをため、体が弱かった。
- 貧すれば、とのことわざどおり、言葉で言われなくとも、行動面での弱者への風当たりが強くなった。
- 頼りたい時に頼れる場所があるって素晴らしい事だと、改めて思いました。
- 地方公務員の悪い慣例を改革するよう、一丸となって声をあげづづける必要がある。
- 生活において制約はやむを得ないが、ワクチン接種が普及し一日でも早く通常の生活を送りたい。
- 面会、外出ともできず、個人的に活動ができない
- 情報過多で疲れることが増えましたが、これまで参加をあきらめていた会議や集会に、オンラインで寝転んで参加できるようになったことはうれしいです。前の質問で「嫌なことを言われたか」に0回と回答しましたが、杉並区長のトリアージ発言をはじめ、優生思想としか思えない政治家の発言にとっても傷つきました。民間に丸投げで責任を放棄している厚生労働省の発言にも、とても傷つきました。回数は10回以上です。
- 今後、介助する人を探しにくくなるのが心配。
- ストレスがたまると介助者にあたり、体調不良になりやすい。行政が早く「障害当事者がコロナになった場合」や「介助者が来れなくなった時」の対策をきちんと実現可能なものを出してくれたら、少し不安がなくなる。
- 早くコロナ禍が終わって欲しいです。
- 感染がこれ以上広がらないで欲しいです。介護者の確保が難しくなるためです。
- ワクチンもまだ分からず、不安です。副作用と打つ時期が分からない
- 早くコロナが落ち着くと良いと思う
- 互いに合理的配慮や合理的遠慮もあり得ると、考えています。
- オンラインの適切な活用、活動や交流を見直して必要でないものは削っていくなど、良い変化は今後も継続してもらいたい。障害を持っていることで生じている

コロナ禍ならではの不便は障害種によってもちがうと思うので、どこかでまとめて今後を活かしてほしい。

- 事業所がサービスを提供しなくなったことで、利用する側の困ったことをもっと考えてほしい。1年以上、グループホームからの外出を禁止されている状況を見て、虐待ともいえる状況だと感じる。また、それを見て見ぬふりをする行政や、同業事業所にも問題がある。普段使っていない事業所が、勝手に在宅支援の請求をしているなどの問題が出ている。在宅支援にもかかわらず、送迎費用の自己負担を請求されるなど、事業所の不正がうかがえます。
- マスクがづらい。自由に外出したい。感染の危険を感じずにみんなと会いたい。
- コロナ感染に対して不安に思う。ワクチン接種もまだ若い世代や障害のある人に摂取したケースをあまり聞かないので打つべきかどうか悩む。人と直接会うことが制限され不便に思うこともあるが、遠方の人とオンラインでつながることは新しい発見。高校の受験では重度障害の為に介助者が複数必要で、当事者がコロナに感染した場合は追試という形で試験を受けることができるが、介助者が感染しても追試に回ることができるよう県教委に要望を出してもかなわなかった。無事今年の試験は受験は出来たが終了までハラハラした。合理的配慮っていったいなんだろう、どうしてこんなに浸透していないのだろうと思い啓蒙活動の必要性を感じた。
- 電車に乗ること、コンサートに行くこと、買い物に早く行けるようになりたいです。

IV. アンケートから見えてきたもの

2021年8月12日までに29名もの回答が得られた。広い年齢層の人から回答していただいたのは有り難い。しかし障害の種類は偏りがあり、肢体不自由が多く、視覚障害が0。このアンケートは全ての障害を念頭に置いて作ったものだが、周知が一部のグループに限られ、回答方法が視覚障害の方にとってしにくかった可能性がある。

(1) 入所施設について

回答してくださった方の福祉サービス利用状況を見ると、施設入所支援を使っている人は1名いた（E。アルファベットは「結果」の該当箇所を示す）。新型コロナウイルス感染症の状況下では、障害連のメンバーの話や報道等で入所施設の厳しい現状が伝わってきている。本調査を実施した側としては、施設入所されている方の声が少なかったことは反省点である。アンケートの回答方法が施設では難しい点があり、インターネット利用の制限、回答するときに介助者がいないなどの問題がある。またコロナ禍で、我々自らが施設に出向いて回答をしてもらうことができなかった。

施設入所支援を使っている人の回答を見ると、外出は「できていない」、その理由を「施設で止められている」としていた（I）。「コロナウイルスのせいで、会いたい人に会えない事が不満」と述べるなど、施設の人にとっては、感染症の早期収束は優先事項である。国連は、入所施設を感染リスクが高いものとし、脱施設化ガイドラインを作ろうとしている。各国の入所施設について聞き取りを実施し、2022年を目途に策定する。障害者入所施設は公衆衛生の面からも漸次縮小すべきであると考えている。

(2) 福祉サービス

回答してくださった方は、重度訪問介護、居宅介護を使っている人が多かった。そのなかで、コロナ禍でも制限なく利用できた人は21名のうち9名いた（F）。しかし、「使えたが制限された」「使えない」を合わせると12名いて、5月の中間発表のときと反転していた。新型コロナウイルス感染症のまん延が長期化し悪化すると、福祉サービスも徐々に制限せざるをえない状態に陥る。

12名は「施設、事業所から」、「職員、介助者から」制限を意味することを言われたとしている（G）。内容としては、「親と同居の場合一方的にできないと言われた」「介助者の考えや生活環境があるから仕方がない反面、こういう介助者が複数いたら、生活できなくなると思った」、「唐突に言われた」等というものだった（G）。制限に対して「やや不満」「非常に不満」と感じた人は、13名のうち10名いた。

感染症の大流行期の支援は、障害当事者にとっても、支援者にとっても感染リスクが高く不安に感じるのは当然である。行政も交えて障害当事者と支援者がコミュニケーションをとってそれぞれのくらしを探っていく必要が特にある。行政は、放置せず二者の対話に寄り添ってもらいたい。制限を「唐突に言われた」とする人がいたが、そのような雰囲気になる環境は、行政が関与して改善することが大切である。「通所日3日→2日になって、1年以上です」という訴えは、自分の必要な支援が長期間妨げられていることであり、放

置すべきではない。“パンデミックだから仕方ない”ではなく、どのようにすればニードを満たすことができるかを考える姿勢が重要である。

(3) 制度の谷間

普段から福祉サービスを使っていない人に、コロナ禍でのサービス希望を聞いたところ、8名のうち8名が感じるとした(H)。感染症の大流行は、いままでの生活ができなくなり、支援の必要性が明らかに増してくるであろう。医学的診断ではなく、その人の生活実態に基づいた支援判断が一層求められる。

(4) 外出について

コロナ禍で思い通りに外出できているかを聞いたところ、29名のうち18名ができていなかった(I)。これは5月の中間報告と逆の結果になっている。より感染力が強いデルタ株の発生と行政による感染制御の甘さで、まん延が長期化している。上述の福祉サービスと同様、長期化は生活に支援が欠かせない私たちに暗い影を徐々に落とす。外出できていない理由を見ると、障害特有のものは少なかったが、「更に具合が悪くなるので。コロナウイルス感染も恐怖です。」「コロナ感染がこわい。かかりつけ医に間違いなく重症化といわれている」という声があった。

私たち障害者にとって外出は、自己実現の大きな一つであることに加え、健全者社会の障壁を可視化し問題提起、対話による解決する最初のステップである。それがうまく機能しないのは、社会の大きな損失だと考える。様々な人が外に出かけ、いろんな活動することは社会にとっては欠かせない。

(5) 活動・仕事について

コロナ禍で活動・仕事スタイルに変化があったかを聞くと、「自宅での活動、仕事が増えた」と「完全に自宅での活動、仕事になった」を29名のうち16名が選んだ(L)。テレ活動に対し、28名のうち9名がやや満足・満足と回答し、19名が不満傾向だった(M)。回答者は感染症で急に生活スタイルが変えざるを得ない現状に戸惑っていることが伺える。満足度の理由を見ても、賛否両論ある(N)。

新型コロナウイルス感染症の流行抑止には、テレワークが有効とされる。しかし、政府や自治体には呼びかけのみでなく、そのための支援を講じる必要があるのではないか。例えば、必要な機材の貸与、通話アプリが使いにくいのであれば、アクセシビリティ改善をアプリ会社に求める。

今回のパンデミックでは、あえて感染予防と経済を対立概念とし経済を重きにおく日本政府の姿が垣間見れた(PCR検査の拡充、療養時の工夫、インターネット活用などを徹底的に行えば感染予防をしながら経済は回すことができる)。そうした政府の姿勢は感染の長期化を招き、そのつけは、私たち障害者にも回っている。このパンデミックで障害当事者が何を体験したのかを記録し、感染の最中、収束後に社会に訴えていきたい。この報告書がその一助になれば幸いである。

アンケートを作るのに参考にした資料

最後に、参考として載せておきたい。国際障害同盟は2020年前半に、世界の障害者に対して、新型コロナウイルスの感染懸念にある社会状況（以下「コロナ禍」）に関するインタビュー調査を行った（※1）。40以上のインタビュー記事が紹介され、上記の悩みが世界各地の共通のものであると示してくれた。また精神障害者当事者ポルケは、2020年4月～5月にかけて「精神障害がある人の新型コロナウイルスの影響後の生活に関するアンケート調査」を行っている（※2）。この調査では、定額給付金の支給が世帯主に支払われる経済的虐待の懸念や、当事者活動にはオンラインともに対面でのコミュニケーションが欠かせないことが分かる。

注 ※1：International Disabilities Alliance 「Voices of People with Disabilities During the COVID19 Outbreak」

※2：精神障害者ポルケ「精神障害がある人の新型コロナウイルスの影響後の生活に関するアンケート調査」 (<https://porque.tokyo/2021/01/28/post-2969/>)